

の方が「顕わなカリキュラム」よりも強い教育力をもつことや、人権教育のあり方に関する国際的な議論においても「教育環境そのものが人権的であるかどうか」を批判的に問い直そうとする問題意識が強まっていることなどから、「価値の教え込み」に対する批判としては理解できるのだが、結局、「スピリチュアリティ」を大切にする教育こそESDにふさわしいという主張に力点がおかれているように思われた。あらゆる学校においてESDに取り組むことが可能であることを示すために、例えばシュタイナー学校における実践のどのような特徴を公立学校に導入することができれば、今後に向けた展望が開けるのかについて、さらに踏み込んだ議論があればよかったのではないかと思う。

ユネスコは「ESDの10年」を主導する国際機関として、「社会文化の視点」「環境の視点」「経済の視点」を「国際実施計画」における3つの視点として提起しており、またこの「社会文化の視点」に関連して、文科省は「人権教育」「異文化理解」「男女共同参画」「エイズ克服」などを課題としてあげ、「民主的で

参加型の社会構築」をうたっている。最近日本各地で「アジェンダ21」という名称の市民組織が立ち上げられ、産業やライフスタイルのあり方を根本的に見直すための具体的提案を行っているが、「持続可能性」の視点にたつて、社会の構造的変革をめざそうとしているこのようなESDの具体的な中身についても、本書から十分に見えてこない。

評者は、本書のタイトルから「持続可能な教育社会」の全体的な方向性が示唆されるものと期待して読んだのだが、述べられているさまざまな事例や主張については、示唆されることがらや納得できる点が多々あるものの、「環境・開発・スピリチュアリティ」という副題にもあるように、結局「支配的なモダンの世界観」に対抗する「心のありよう」に着地点を見いだすような内容構成になっており、社会変革を指向するESDの「ホリスティック」なベクトルが、どうもその陰に追いやられてしまっているように感じたしだいである。

◆A5判 209頁 本体1,714円
せせらぎ出版 2006年3月刊

■ 書 評 ■

多賀 太 [著]

『男らしさの社会学——揺らぐ男のライフコース』

明治学院大学 望月 重信

著者は2001年に『男性のジェンダー形成〈男らしさの揺らぎのなかで〉』（東洋館出版社）を刊行している。ジェンダー

問題は殆どが女性の問題であり、性差別が女性に向けられた差別であるという自明性。また男女共通に期待される「社会

的役割」と女性に託される「役割」とのあいだで女性が抱く役割葛藤。この葛藤が女性自らの性のあり方に起因するが社会のなかで性のあり方が経験されるのは決して均一ではなく多様になるという現実。

こうした葛藤と現実とは男性においては経験しにくいことであり、また経験が同質であると筆者は指摘する。しかし「多元的変動社会」のもとで性秩序や性規範は多様化してきて男性もみずからの性のあり方に葛藤や揺らぎを経験しているのだと主張する。女性学は男性中心の物の見方を排除し女性自身の確かな眼で世の中の諸事象を解釈し直すことを訴える。この訴えの背景に「男性を人間一般」と捉える暗黙の理解があった。筆者が「男性をあたかも人間一般とみなす」前提にはジェンダー化されていない存在として男性を見ている。そしてこのことは近代科学が男性中心の学問とみる女性学の立場とも通底する。

本書のオリジナリティは「ジェンダー化された存在」として男性を見ること、人間一般化された男性像ではなく「男性性」とのかかわりで追究する姿勢にある。本書は前作の問題意識の延長線上にあることをここで確認しておきたい。

本書のまえがきで筆者はこう述べる。『男たちの人生が大きく揺らいでいる』と。副題にライフコースとあるがその視点は「現代日本の男性たちの生活状況をそれぞれのライフステージと生活領域において分析する」ことであり、筆者のこだわりは先述したように男性を「ジェンダー化された存在」とであるとみなしたと

き「揺らぎ」と葛藤を無視できないということである。そして一貫して男女の権力関係と利害関係にも注目しつつ「あれかこれか」の不毛な対立と水かけ論を超えて〈複雑で多様な個別の男女関係〉を読み解こうとする真摯な姿勢に好感を覚える。

本書は8章で構成される。1章はジェンダーとしての男性研究の方法を提示し、また男性学の方向性を示唆する。2章は学校教育のなかの少年たちとかかわる教師の校内秩序と男性支配との相関（男らしさと力の結びつき）、「協力」や「思いやり」が「女らしさ」と結び付けられ一方で女子生徒に「女らしさ」を助長し、他方で男子生徒は力関係に敏感になるよう仕向けてしまうと指摘する。3章で青年期の「男らしさ」が一人前の基準であることからくる葛藤を描く。4章で「ポスト青年期」の男性の経験に着目し、労働市場下で女性が周辺化される一方で若者たちの間で「男女収入格差」に反映し、大人になることの意味の揺らぎが起こっていることを指摘する。5章では企業社会のなかで男性が主導権を担っていくプロセスを捉える一方、権力と権威が男性に集中するが近年の雇用関係と構造の二極化は「男性内格差」を惹起させる可能性があることを示唆した。そして6章で、いま父親の育児参加が唱導されるなかで依然として稼得責任が父親に求められる現実を取り上げ、いま分業形態を支持する女性たちの「女性のいいとこどり」に父親の「戸惑い」を読みとる。

7章と8章では、高齢期の男性が直面する危機、つまり退職や転職、労働形態

の変化を丸ごと経験する現実に対して耐性を経験してこなかったことによる男性たちの葛藤や危機を予想する。そこで、「男性運動」の活動を回顧してその危機にある男性たちの人生の大きな揺らぎの解決の糸口を示唆している。

本書は女性学の対抗策を意識した男性学の昂揚を謳うものではない。筆者自身メンズセンターの会員であり、男性の制度的特権と男らしさのコスト、そして男性内の差異を含めた男性の生まの生活状況を相対化する筆者自身のライフコース模索の書と読んだ。

いま、「男は元気がない」とか「中高生たちは何を考えているのかわからない」とか「団塊世代の第2の人生論を追う」に見るように「男性言説」が喧伝されている。その言説のウラに「男性の人生や生活が人間の普遍的モデルではあり得ないこと、男性も女性とは異なる意味でジェンダー化された特殊な存在なのだ」(多賀太『つくられる男のライフサイクル』阿部恒久、天野正子他編「男性史3・男らしさの現代史」日本経済評論社、2007)という指摘に注目しておくことが必要である。その意味で本書は社会に警鐘を鳴らしている。

筆者はジェンダー問題が「男性問題」となっている現実を凝視しその諸相を本書で描いた。とくに団塊世代が「男性優位社会」から「降りる」ことになったあとに来る第2の人生を生きる男のアイデンティティ危機について今後幅広い議論が求められる。危機の一つに男性支配を維持するためのコストの負担が増えてきたことがある。しかしこの危機意識から

男性は地位回復支援を求めることが解決であり得ない。まして「被害者」意識の自己呈示を生きることでもないだろう。筆者は「女性の地位向上への取り組みをさらにすすめること」を強調する。評者もこの提案に賛成である。ではどうやって男性たちは取り組むのだろうか。

筆者は今後「マクロな社会レベルでのジェンダー公正と男性たちが置かれている個別の状況を見極めながらすすめていく」と述べる。私たちが生きるこの社会は筆者の指摘する「男女の生活を非対称に構造化する」ジェンダー化された社会である。そこでは、「ヘゲモニックな男性性」と相補的な関係にある社会の理想とされる「誇張された女性性」とのあいだで一種の「せめぎあい」が演じられるだろう。

筆者もこのことを知っている筈である。それだけにジェンダー公正を大上段に振りかざすのではなく男性の個別状況を一般化することに急いで「一学」というフレームワークを創って自足しない、そういう緊張に満ちたジェンダー研究を筆者に期待している。

◆B6判 221頁 本体1,800円
世界思想社 2006年5月刊